

# 日本農業新聞

\* 日本農業新聞

平成24年 1月30日 掲載

長野ベリーファーム株式会社様

根活をご利用頂き、収量アップ！



分けつして葉を茂らせ、大きく実ったイチゴ「章姫」を管理する岡田さん（長野市で）

## マイクロナノバブル水資材 イチゴ肥大に有望 10アール8トンどりも

長野の農家

超微細な気泡のマイクロナノバブルを含んだ水資材が、利用した農家から「作物の増収効果がある」と注目されている。独立行政法人・産業技術総合研究所とベンチャー企業のアースリンク（神奈川県二宮町）が開発し、同社が販売する。試験

「農家は肥大が良く、25%増収した」という。

マイクロナノバブルは直径が数百ナノメートル（1ナノメートルは100万分の1メートル）の気泡。この気泡を専用機で作り、数種類のミネラルとともに水に溶かし込んだ。産総研は「気泡の周りにミネラルのイオンが集まる。般のように取り囲み、気泡が水に溶けにくくなる」（環境管理技術研究部門）と説明する。気泡が水中で数カ月保たれるのが特徴だ。商品名は「根活」。製法の特許を共同で申請中だ。

長野市の長野ベリーファーム（株）は、ロックワイル兼液栽培のイチゴ「章姫」で「根活」を2010年定植の昨シーズンから活用。JA県営農センターでイチゴの栽培指導をした経験もある代表の岡田敬司さん（52）は「昨

シーズン産の10アール収量は7・5トンで、前作を1・5トン上回った。収益も比列して伸びた」と喜ぶ。

岡田さんは月2回、兼液1トンに「根活」を20リットル混ぜて使う。「根が活性化して株の力を強める。収穫の終わる初夏まで、前年よりも一回り大きな果実が実った」。根の吸収力が高まるとみて、今シーズンは兼液の肥料濃度を高めて栽培する。「株が例年より大きい。10アールで8トン近い収量を目指したい」と意気込む。ただ、マイクロナノバブルが生育を促す仕組みは明確ではない。アースリンク社の久米隆廣代表は「気泡がマイナスの電気を帯びて養分を吸着し、根に送る役割を果たすのではないかと推測。長野県野菜花き試験場の担当者は「気泡には根に酸素を供給する働きもありそうだ」とみる。